

ちよーびいきゃんでい

「いらっしやいませ〜、おおもりの飯にようこそ〜」
 いつも窓から、ちよつと抜けたいつもの声が、あ
 たりに響いた。

「なあに、相楽^{さがら}くん。お母さんまた忙しいの？」

「ああ。急に仕事入っちゃってさ」

前からわかってりやよかつただけど、いきなり
 めぐみんとこに夕飯たのめないし、それに、

「妹にヘンなもん食わせられないからな」

「はいはい、まいど それじゃ、相楽^{さがら}さん家用のス
 ペシャル2つね。相楽くんは大盛りにする？」

オレはすぐ手を振った。今日はそこまで腹へって
 ねえからな ーん？

「ごめん、スペシャル用のおかず、ちよつとかかる
 みたい。少し待ってくれる？」

ああ、って言ってるはずいたら、大森が片手を顔
 の前に出して、

「ごめんね。 あ、いらっしやいませ〜」

オレは窓からちよつと避けて、壁によっかかりな
 がら川のほうをぼーっと眺めた。

「ま、早めに来てよかつた、ってとこか」

「毎度ありがとうございました」

大森の音が、ちよつとほっとしてるな。

そりゃそうか。さっきまで20人くらいずらーっと
 並んじまって、さばくの大変そうだったもんな。

「あー、ごめんねえ。相楽^{さがら}くんのまだなんだあ」

ひょいつ、と窓から顔出して、大森が言った。

「おー」

オレはそれだけ言って、また壁によっかつた。
 たしかに待たされてるんだけど、あれじゃあな。夕

3 ちょこざいきゃんでい

イミングが悪かったと思つて、あきらめるか。

「ありがと。それじゃ、真央ちゃんにはこれ、ふたつあげるね♡」

ひゅっ、と延びた腕から、黄色いのふたつ。オレはちよつと壁から離れて受け取つた。

いつものキャンディか。真央が喜ぶだろうな
「相楽くんも欲しいなら、20円よ」

つて、おい。オレ、そんなもの欲しそうか？

「ちえっ。がめついな」

「あたりまえです。働かざるもの食つべからず、ね」

はあ。確かにな。こいつが遊んでるとこなんて見たことねえ。めぐみと一緒にいるとこ見ても、なんか働いてる感じなんだよなあ

「プリキュア〜」

いいっ!?

首かしげて、こつち見てるよ。いきなり、なにを

「めぐみちゃんがねえ、最近こころのうたを歌つてくれないんだなあ。ついこの間まで、プリキュアの

歌だつたんだけど」

「べ、べつに、オレには関係ない、だろ」

なんとか答えたオレに、大森がにこっ、って顔しやがつた。

「そつだよねえ。関係ないよねえ さてと、さつき

なくなつちやつたから、作り増ししないと」

背中向けてなにか声かけたら、奥のほうで「トトト音」がし始めた。おいおい、

「オレの注文の方が先だつたはずだけどな。それも、

だいぶん」

「そつねえ 楽しみは、多い方がいいから」

そつ言つて、またにこっって顔しやがる。さっきのも楽しみかよ。

まあ、こついう奴だからな。ちつとは付き合つたか。

特に、いまはめぐみにやることできちまつたから

おつと、お客さんか。

「あ、いらっしやいませ〜。はい、たけのこご飯ぶたつ、ぶつう盛りですね。毎度ごうも〜」

やれやれ。壁の方にぱつと避けたオレの脇に、また並んでるのを見て、ついばそつと言っちまったよ。「まあ、今日のメシは遅めだぞ」

「あ、ごめん相楽くん。そのポスター、隠さないでね」

お客の列が切れたところで、大森がまた声かけてきた。ポスター？ ああ、背中のがこれか。

窓の脇の壁にあつた貼り紙には大きく『贈りものキャンディ教室』

「キャンディ、ってことは、ホワイトデーかよ」

「そつ。去年とか、わりと買っていく人が多くって」黄色いキャンディの入ったピンをばんぽんとたたきながら、大森が言った。

「それって、出来合いなんじゃないのか？」

「このピンの？ 間違いないわたしの手作りよ」

オレはさつきもらつたキャンディをポケットから

取り出して、眺めてみた。大森が作ったキャンディ、他の女子にやるのかよ

「なんつーか、そういうもんじゃないんだろ、ホワイトデーってのは」

まあ、オレの気にしすぎかもしれないけど、なあ。

「ん」 あなただけの、っていうのが欲しい？」「うん。そうなんじゃねえのかな。

首か上げた大森に、ついうなずきかけたところで、「欲しい？」

「つて、もう一度くびかしげてきた。え？」

「お、オレか!? いやいやいやいや、オレ、おまえにチヨコなんかやってないだろ！」

思わず一歩下がつちまった。なんでじーっとオレ見てるんだよ！

「わたしじゃなくてね。相楽くんとめぐみちゃん、なんだか秘密が増えたみたいだったから。相楽くん、チヨコ作って渡したりしたのかなあ、つて」

「そついや、こいつが一番めぐみに近いとこいたん

だっけ。あぶねえなあ。

「にしても、なんでオレから渡すんだよ。渡すならめぐみからオレだろ？」

「欲しかったの？」

いきなり否定されて、めぐみ　まあ確かに、

あいつが作って贈るとは思えないもんなあ。けど、

「欲しくねえよ。とかして固めただけのもん」

できないわけないんだろつよ。作る気ないだけで。

「でもそれでも、めぐみちゃんが作るなら。めぐみ

ちゃんから渡されたら、嬉しいし効き目あると思う

けど？」

「まあ、な」

あいつも、そのうち

「誰のために作るんだろうなあ、なんて、考えてる

でしょ？」

うえつ。気がついていたら大森が、窓から身を乗り出

して、オレに近づいてた。な、なんだいきなり！

「ふふふ。お客さまの表情はちゃんと読めないかね。

それじゃ来年チヨコモらったときのために、ホワイ
トデー限定、特別キャンディ教室をどつぞ。気になっ
たら参加してね」

窓の外の貼り紙取り外して、大森がオレの前にぶ
らさげた。なんだかなあ。

「いらねえよ。そんなちょこざいきゃんディー！」

「あ、それいただき。『ちょこざいきゃんディ教室』っ

と。ちょこざい、ちょこざい。ふふ、いいなあ、これ」

ペン片手に、へんな歌うたいやがって。なにが気

に入ったのか知らねえけど、何度も繰り返し返されると

恥ずかしくなってくるぞ、こっちは。

「めぐみちゃんも気に入ってくれると思うわ。ノリ

ノリで生徒さん集めてくれそう」

「あいつ、お節介だからな」

あのヒメとかいう子にしても、プリキュアにして

も　ホント、いつか怪我すぞ、あいつは。

「ふふふん」

気が付くと、ポスター書く手をとめて、見上げて

る大森と目があつた。

「な、なんだよ、ジロジロ見やがつて」

「名前だけで、いろいろ考えちゃうんだあ。かわいいかわい女の子だもんね」

今度はにやにや顔かよ。やれやれ、女の子、ねえ。

「オンナじゃねえだろ、あいつは。たまに、下着まで干してるからな。オレがペランダいるつてのに」

「相楽くんだつて、真央ちゃんの洗濯物も干してん
でしょ？ 下着も」

「いっつ!？」

一瞬、目の前の大森の後ろに、悪魔のしつぽが見えた。な、なんで、それを!？」

「めぐみちゃんが言つてたよ。やさしいお兄ちゃんだよねえ、つて♡」

あーいーつーっつ!! いや、怒つてる場合じゃない。どうやって「まかしやいいんだ? えつと、えつと」

「あ、もちろん、クラスでは話してないから」

ああ、もう、うるせえっ!」

「ほら20円、アメもらうぞー!」

オレは、ぱつと小銭投げてキャンティつかんだ。包み紙むしつて大森に背中向けながら口に放り込むと、甘い味が広がってくる。

なんか、ほつとする味だよな。真央がねだるのもわかるんだけどさ。

「ぷりつきゅあ〜」

んぐつ!？」

「ぐぐぶつ、げつつ な、なんだよいきなり!？」
のどにつつかえそうになって、とっさに噛み砕いたからよかつたけどよ!」

「あれ? なにかあつた?」

にっこにっこしやがつて、こいつはっつ!

「息がでなくなるとこだったぞー!」

「あら〜。なんでそんなに慌てたのかしらあ?」

さつきから、絶対わかつて言つてやがるな、こ

7 ちょこざいきゃんでい

いつ。 はあ。 たぶん隠し通すなんて無理なんだろうけど、

「別に!!」

けど、オレから言うわけにもいかないよな。言うなら、あいつからだ。

『——わたしのおせっかいは、まだいらぬ、か』
ん？

キャンディのカケラをなんとか飲み込んでる間に、なんか聞こえた気がしたな？

「いま、なんか言ったか？」

「え、なに？ あ、めぐみちゃん♡」

いきなり大きく手を振ったと思ったら、ひよいつとオレの口にキャンディもうひとつ放り込んで来やがった。

「ほんとに、ちょこざい、だな」

甘い味の中に、ちよつとレモンの酸っぱさが染み出てきてる。ふつうの、キャンディだ。

でもその味の中で、まだ大きく手を振ってる大森を見てると、なんとなく大丈夫な気になってくるよ。問題なんか、まだひとつも解決してないってのに。

「ま、効くよな。こいつのも」

—おしまい—